

『古代アメリカ』21, 2018, pp.39-55

<調査研究速報>

ペルー北部ネペーニャ市周辺の形成期遺跡踏査

—時期比定と居住エリアの再検討を中心に—

芝田幸一郎（法政大学）、宮野元太郎（大阪観光大学）

1. はじめに

本稿の目的は、ペルー北部中央海岸地方ネペーニャ河谷下流域（図1）において、先行研究による諸遺跡の時期比定を、筆者らのフィールドワークで得られたデータを主な根拠として再検討すること、および同地における各種形成期遺跡、とりわけ神殿と居住エリアの位置関係について仮説を立て、検証を試みることである。これらをもって、同地における今後のセトルメントパターン調査および発掘調査に基づく形成期研究の指針を示したい。

北部中央海岸地方は、北海岸クピスニケ文化圏、中部海岸マンチャイ文化圏、北部山地カハマルカ県諸遺跡、北部山地チャビン・デ・ワントル遺跡など、形成期中期～後期にかけての歴年の発掘資料が充実している地域のほぼ中央に位置するため、交差年代決定法の利用や地域間関係の検討に適している[芝田 2011; Shibata 2010]。また、ネペーニャ河谷そのものも、今世紀に入ってから各国の研究者による発掘調査・踏査が集中的に実施されており、地域内の遺跡間の詳細な比較分析も可能となりはじめた[cf. Chicoine et al. 2017]。とりわけネペーニャ市周辺のおよそ6km四方のエリアでは、2002年以来断続的に芝田が発掘調査を実施している2遺跡がネペーニャ川を挟んだ兩岸に位置し、それらの周囲にも形成期の可能性があるマウンド等が多数分布している。しかし後述する1960～70年代の踏査では未登録遺跡が多いことを、上記発掘調査に伴う予備的踏査によって芝田が確認していた。そこで、この先行研究の不足が顕著なエリアにおいて、筆者らは2016年から集中的に踏査を実施した。

本稿で研究対象とする時代は形成期であり、特にその中期（前1100～前800年）と後期（前800～前150年）に注目する（表1）。これは米国系編年体系における草創期と前期ホライズンにほぼ対応する。三千年近い時間幅のある形成期の中でも中期と後期に絞り込む理由は複数ある。まず、芝田の発掘調査によって確立したネペーニャ下流域の形成期編年の中でも、土器、建築、放射性炭素年代測定値などのデータが最も充実した時期であり、後述するように各時期の土器や建築の特徴が明瞭である。そして、中期から後期にかけては、筆者を含む多くの研究者が形成期アンデス広域における大きな社会変化のタイミングであるとみなしているように[Burger 1992; Onuki 1993; Shibata 2010]、考古資料から比較的容易に各種変化を見いだせるのではないかという期待もある。形成期の編年に関しては、日本の調査団が長期にわたって発掘調査を重ねてきた山岳地帯では、神殿更新などに由来する新旧諸建築の重なった遺跡の大規模層位発掘に基づき、多くの研究者に信頼される成果が得られている[cf. Kaulicke 2010]。一方、海岸地帯の諸河谷下流域では、ネペーニャ河谷を含む一部地域

に関しては特に、充実した形成期編年の不備がかねてより指摘されていた [Kaulicke 1998: 16]。筆者は、この編年問題の最大の要因として、海岸地帯では形成期中期と後期の建築が重なり合っている遺跡が極めて少なく^(註1)、発掘事例がないことに着目し、ネペーニャ河谷下流域に位置するセロ・ブランコ遺跡の発掘調査を2002年に開始した。セロ・ブランコ遺跡では形成期前期(ワンボカヤン期)、中期(セロ・ブランコ期)、後期前半(ネペーニャ期)、後期後半(サマンコ期)の文化相が確認され、中期から後期後半までに関しては近隣のワカ・パルティエダ遺跡の発掘によって補強されることになった [芝田 2011; Shibata 2010, 2011b]。これら2遺跡の層位発掘で得られた地域編年は、本稿における分析の要となるものである。

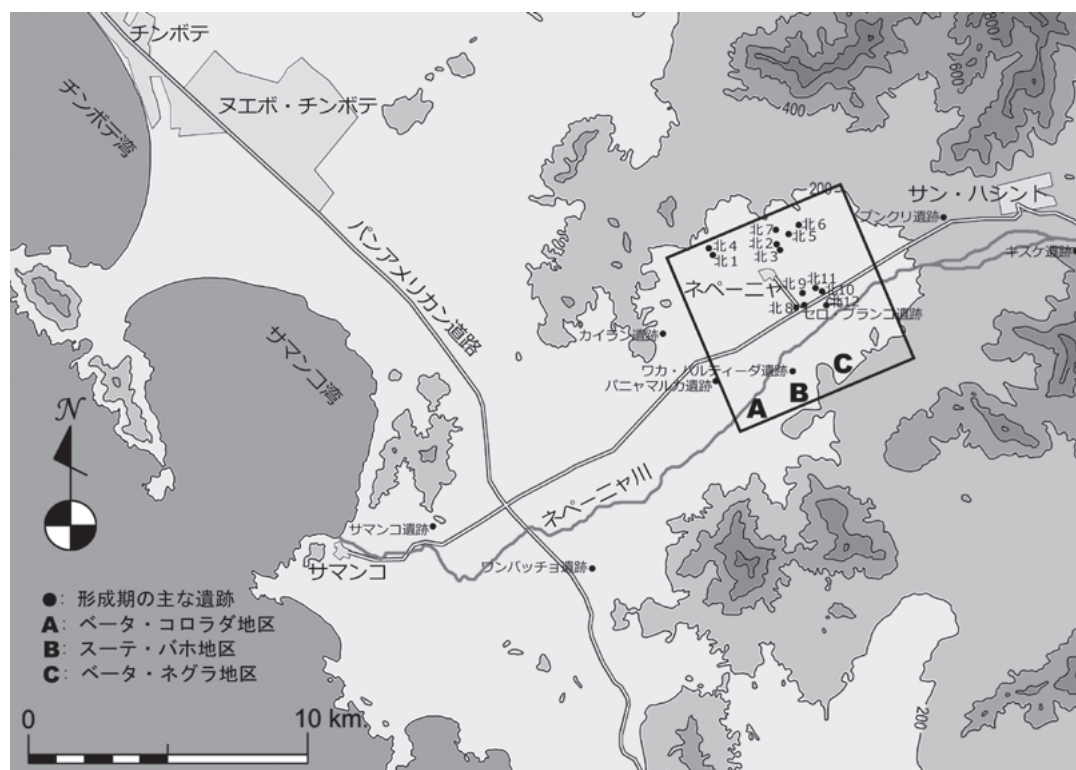


図1 ネペーニャ河谷下流域と調査範囲

ネペーニャ河谷のセトルメントパターンに関しては先行研究があり、下流域では米国の考古学者プローが1960～1970年代にかけて集中的に踏査を行っている [Proulx 1968, 1973, 1985]。中流域では1970年代にプローの指導学生であるダゲットが同じ登録システムを用いて踏査し [Daggett 1984]、また芝田のセロ・ブランコ遺跡発掘と遺物分析に参加したペルー人考古学者イケハラが2010年代に網羅的踏査を実現している [Ikehara 2015]。ここで問題として取り上げねばならないのは、米国の考古学者らによる踏査で登録された遺跡の時期比定である。ネペーニャ河谷ではテーヨらによる1930年代のセロ・ブランコ遺跡南基壇とプンクリ遺跡の小規模発掘を最後に、長らく形成期遺跡の発掘は実施されておらず、したがってプローらの踏査では表採土器や地表に露出した建材の時期比定に際して、他地域における当時の不完全な編年資料との交差年代決定法に頼らざるを得なかった。そのため、形成期の遺跡が下流域には乏しく、中流域に不自然なほど偏って分布する結論に

なっている [Proulx 1985]。セロ・ブランコ遺跡の土器編年を熟知し、これに立脚したイケハラの踏査とは異なり、下流域ではセトルメントパターン研究の根幹である時期比定の見直しが必要な状況であったと言える。

本稿のもう一つのテーマである神殿ないし祭祀センターと居住エリアの位置関係は、上述した時期比定の再検討を基にして考察される。これはアンデス考古学では都市の出現過程等と関連して古くから議論されてきた問題であり、神殿の構内や隣接地などに常住する者が少なかったという「空っぽの祭祀センター (empty ceremonial center)」説は、データの乏しいアンデス形成期の事例にもしばしばあてはめられてきた [e.g., Burger 1981: 600; Lanning 1967: 91, 103]。ネペーニャ河谷の先行研究では、主に中流域に関する説が提示されてきた。プロー [Proulx 1985: 261-263] は、前期ホライズン前半 (形成期後期) の神殿は下流域の谷底にあり、居住エリアがあるのは主に中流域で、しかし谷底ではなく、丘の上、台地、谷底の縁端などにあったとしている。イケハラ [Ikehara 2015: 166-169] は時期差を明確な形でとらえている。形成期後期前半の神殿は河川に近い位置にあり、居住エリアとは離れていたが、形成期後期後半になると河川から離れた居住エリアの付近やその内部に神殿が建立される傾向を指摘している。いずれの時期も居住エリアとしては耕作地に適さない土地が好まれるという [Ikehara 2015: 145]。芝田による下流域のセロ・ブランコおよびワカ・パルティエダ遺跡発掘では、形成期中期と後期前半の神殿建築が確認されたが、神殿内の居住施設は全く発見されなかった [芝田 2010]。筆者らが 2016、2017 年に実施した踏査の狙いの 1 つは、セロ・ブランコとワカ・パルティエダの神殿に対応する居住エリアの可能性が高い遺跡を絞り込むことである。その際、中流域におけるイケハラの説が下流域にも当てはまるか検証を試みる。

時期 (略称)	年代 (B.C.)	較正年代 (cal. B.C.)	セロ・ブランコと ワカ・パルティエダ の時期別特徴	ネペーニャ谷 における他の 形成期遺跡	
サマンコ (SM)	500-250	450-150	放棄・再利用	カラン サマンコ ワンパッチョ	形成期後期
ネペーニャ (NP)	700-500	800-450	巨石神殿		
セロ・ブランコ (CB)	1000-700	1100-800	アドベ製神殿 ・壁面装飾		形成期中期
ワンボカヤン (HC)	1300-1000	1500-1100			形成期前期

表 1 ネペーニャ河谷下流域の形成期編年

2. 踏査報告

2-1. 踏査の概要

本調査としての踏査は、2016 年 8 月および 2017 年 8 月に、合計 3 週間ほど実施した。また、後述するワカ・スーテ・パホ遺跡のように、芝田が 2002 年から発掘調査の前後等を実施してきた散発的な踏査および測量で得られた資料も用いられる。本稿で一次資料を用いるのは、ネペーニャ市周辺のおよそ 6km 四方の範囲に収まる諸遺跡である (図 1、表 2、表 3)。この範囲は、ネペーニャ河谷下流域における地域編年の基準遺跡であるセロ・ブランコ遺跡を中心に置き、編年を補強したワカ・パルティエダ遺跡も含まれる。両遺跡から距離が近いこと、踏査による表採土器の時期比定に際して、高い精度が見込まれるという利点がある。また、先述したプローの踏査資料、2002 年以降に筆者が散発的に踏査した際の知見、北米の調査団による発掘資料 [Chicoine 2006

等]との比較などによって、未発掘の形成期遺跡が多数分布すると予想された。自然環境としてはネペーニャ川とその両岸に広がる河谷平野および河岸段丘上の砂漠・岩山等を含むため、地理的諸条件と遺跡配置の関係にアプローチできることも期待された。

時期比定の基準は、長年にわたって芝田が発掘調査を行ってきたセロ・ブランコ遺跡とワカ・パルティエダ遺跡の編年である〔芝田 2011; Shibata 2010〕。特に、形成期の遺跡で出土する割合が高い傾向にある無頸壺の口縁部と短頸壺の頸部の形状に注目する〔Shibata 2011b: Fig.14〕。踏査で器形を同定しやすいだけでなく、ネペーニャ河谷において地方発展期以降は無頸壺そのものが特殊な事例を除いてほぼ皆無であることも重要である〔Ikechara 2018 私信; cf. Rengifo 2014〕。具体的に特徴を挙げると〔芝田 2011: 146-148, 162-166; Shibata 2011b: Fig.14〕、無頸壺の場合、形成期前期から中期にかけては口縁部の断面外側が鋭角で内側が鈍角となるように調整された「内切れ口縁」や、内側が丸みを帯びて肥厚する「内肥厚丸口縁」、あるいは全体に丸みを帯びた「丸口縁」しか見られないのに対し、形成期後期になると口縁部の外側が鈍角で内側が鋭角になる「外切れ口縁」が出現し、それが後期の後半になると大半を占めるようになる。短頸壺の場合、特に形成期中期までは出土数が少ないため、無頸壺ほど明確な特徴を挙げにくい、中期までは頸部がまっすぐ立ったものや円錐台形状のものしか見られないのに対し、後期になると頸部が外反するものが現れ、後期後半にかけて外反の度合いを強める傾向にある。また、胎土や焼成にも時期別の特徴があり、形成期中期までの無頸壺と短頸壺は茶色で器壁が比較적으로ろい Marrón タイプに分類されるのに対し、形成期後期の外切れ口縁の無頸壺や外反系頸部の短頸壺はレンガ色や灰色を呈し非常に硬く焼き締まった Brick Red タイプである〔芝田 2011: 図 5-10, 図 5-17〕。まとめると、無頸壺では外切れ口縁が、短頸壺では外反度の高い頸部が、硬く焼き締まったレンガ色や灰色の胎土と共に、形成期後期の指標になるということである〔Shibata 2011b: Fig.14〕。

踏査の方法上の特徴としては、ドローンの活用が挙げられる。近年ペルー海岸部を中心にドローンを用いた写真測量 (SfM) が各国の考古学調査団によって積極的に利用されているが〔cf. Castillo 2014〕、その解像度の高さは、砂層に埋もれた凹凸の少ない居住地遺跡等を登録するために有効と思われた。後述するように、筆者らの調査においても、Google Earth 等の衛星画像やペルー空軍による航空写真では解像度不足・同定不可能な小規模遺跡が、明瞭に視認され、全体像が把握された。

遺跡名に関しては、遺跡のローカルな呼称や、遺跡の位置する地区名を確認できた場合はそれを用いることにする。多数の形成期遺跡を確認した北岸では、便宜的に踏査順で通し番号を付けた (北 1~12)。ただし北 5、8、9 は形成期の可能性が低いと見做され、記述を省略する。プロウが踏査した遺跡に関しては、彼による登録番号も併記する (PV31-192 など)。

2-2. 北岸の遺跡

北 1 (PV31-192)

ネペーニャ川の北岸、セロ・ブランコ遺跡から 4km 北西の、耕作地と河岸段丘上砂地の境界付近に位置する。プロウ [Proulx 1985: 133-134] によると高さおよそ 7m、南北に 30m、東西に 20m だが、Google Earth での計測では南北 55m、東西 40m であった。北側はゆるいテラス状地形となっているが、土留壁は露出していない。プロウの調査報告には円錐形アドベと無紋土器片の記述がみられ、円錐形アドベに関しては草創期という時期比定の根拠になっている。芝田が 2004 年に初めて訪れた際は、マウンドのほぼ全面が砂で覆われ、アドベ等の建材も土器片も観察できなかった (写真 1)。しかし 2010 年代前半に付近住民が建材用の土砂採取目的で不法発掘したため、2017 年の踏査時にはマウンド東面と北面で内部の円錐形アドベが露出していた。とりわけ北面で

は、外壁や壁の開口部の様子もわかるほど大きく掘り出されていた（写真2）。土器は地方王国期のものと、形成期中期以前に多く見られる内切れ口縁部の無頸壺破片が確認された（写真3）。



写真1 北1 (PV31-192) 遺跡遠景、北から



写真2 北1 (PV31-192) 遺跡南側の外壁開口部



写真3 北1 (PV31-192) 遺跡の無頸壺

北2 (PV31-205)

ネペーニヤの町から北東へおよそ 900m、またはラ・グラマ集落から西へ 900m ほどの地点にあり、左記の町と集落を結ぶ未舗装道路の中間点から北へ分岐する農道に面している。60×30m ほどの楕円形マウンドで、表面には多数の盗掘坑が穿たれている（写真4）。一部の盗掘坑にはアドベ製の壁面が露出しているが、個々のアドベの形状は不明である。地表には地方王国期および地方発展期と目される土器片が多く観察されるが、形成期後期と比定される無頸壺片もある。これは口縁部が外切れで、良く焼成され赤みを帯びた胎土であり、セロ・ブランコおよびワカ・パルティータ遺跡の出土土器分類における Brick Red タイプである。なお本遺跡は、プロローの踏査では後期中間期として登録されている [Proulx 1973: 213-214]。

北3 (PV31-201)

北2 から 100m ほど南東に位置し、同遺跡と同じ農道に面している。60×30m ほどの楕円形マウンドで、表面にみられる盗掘坑は北2 と比べて明らかに少ない（写真5）。農道に面したマウンド東面が掘削されており、断面には長さ 20cm 未満で不定形の小型アドベ (adobito) と、その倍ほどの長さで正確な形状は不明のアドベが観

察された。後者の表面には成型時につけられたと思われる刻線がある。表採土器にはカスマ文化に典型的なものがあるため、ワリ期または地方王国期における利用もあったと思われる [Vogel and Pacífico 2011]。一方で Brick Red タイプで頸部が大きく外反する短頸壺からは、形成期後期後半すなわちサマンコ期の遺構が埋もれている可能性も唆される。なおブローの調査では時期不明とされている [Proulx 1973: 211-212]。

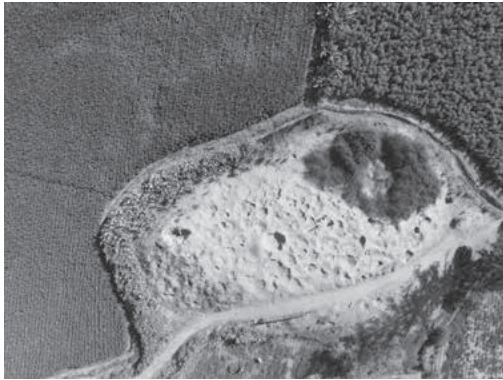


写真4 北2 (PV31-205) 遺跡(右方向が北)



写真5 北3 (PV31-201) 遺跡(右方向が北)

北4 (PV31-27)

北1の約300m北方で、河岸段丘上の砂地に位置する。1967年と1979年に踏査したブローは、盗掘で荒らされた3つのマウンドを報告しており、最大のものでも高さ12mを超えないとしている [Proulx 1985: 44-46]。筆者が2004年に初めて踏査した時点では最北端にある主マウンドでも高さ5mに至らず、その後のGoogle Earthによる計測では南北35m、東西30mであった。主マウンドの中央には大きな盗掘坑が穿たれており、周囲には掘り出された円錐形アドベが散見された。また、若干数の土器片が確認されたが、丸みを帯びるようにやや内側に肥厚した無頸壺の口縁は(写真6)、セロ・ブランコ遺跡の土器編年からみて、ワンボカヤン期またはセロ・ブランコ期に典型的な形状である [Shibata 2010: Figs. 4, 6]。なお、1982年の航空写真(SAN339-82)をみると遺跡の周囲は砂漠だったが、2004年の踏査時には灌漑による農地化が始まっていた。2017年に再訪問した際は、遺跡全体が新設されたアボカド農園の内部に取り込まれており(写真7)、主要なマウンド群こそ残されているものの、その周辺の小規模マウンドの一部は耕作によって破壊を受けたと思われる。



写真6 北4 (PV31-27) 遺跡の無頸壺



写真7 北4 (PV31-27) 遺跡全景、南から

北 6 (PV31-199)

北 2 遺跡から 1km 北東のサトウキビ農地内に位置する直径約 30m のマウンド状遺跡である。マウンド周囲には、かつて土留め壁の一部であったと思われる大型の切り石が散在している。これら石材の中には長さ 1m に及ぶものもあり、セロ・ブランコやワカ・パルティータ遺跡におけるネペーニャ期建築に用いられているものとほぼ同サイズである。地表で観察される土器は、形成期と思われるものが多く、短頸壺の直立した頸部(写真 8)はネペーニャ期に対応すると思われる〔芝田 2011: 図 5-8〕。プロローが PV31-199 として登録した二連マウンド状遺跡の大きい方に該当すると思われるが〔Proulx 1973: 210-211〕、筆者らの踏査時には小マウンドのみあらず、残存するマウンドの表面は不定形の凹凸が顕著であった。プロローが踏査した 1971 年の時点で既に重機による破壊を受けており、その後の半世紀の間に破壊が進行したものであると思われる。なおプロローは表採土器から中期ホライズンすなわちワリ期に対応する遺跡であるとしている。



写真 8 北 6 (PV31-199) 遺跡の短頸壺



写真 9 北 7 (PV31-197) 遺跡全景、東から

北 7 (PV31-197)

北 2 遺跡から北へ 500m の農地内に位置する。およそ 60×40m の楕円形マウンドである(写真 9)。盗掘坑の断面には、不定形の小型アドベと、それより大きな直方体のアドベがみられ、後者の表面には成型時の刻線があった。これら建材の特徴は、北 3 遺跡と同時期であることを示唆している。プロローは時期不詳としているが、筆者らの地表観察では、外切れの口縁部をもつ典型的な Brick Red タイプの無頸壺片を複数確認しており、形成期後期の遺構が埋もれていることはほぼ確実である。

北 10

セロ・ブランコ遺跡の北東およそ 750m、サトウキビ農地内の農道に隣接し、高さ 2m ほど、直径 50m 弱の円形を呈したマウンドである。マウンド南西部を中心に岩石が散乱しており、頂上部には一本の木が立っている。時期比定できるような土器片は確認されなかったが、遺跡の位置、形状、規模、地表面の状態などからみて、次に述べる北 11 遺跡と同時期であると思われる。プロローの踏査では登録されていない。

北 11

北 10 遺跡の北西およそ 180m、サトウキビ農地内の農道に隣接し、高さ 2m ほど、直径 50m 弱の円形を呈したマウンドである(写真 10)。マウンド南西部を中心に多数の岩石が散乱している。マウンド中央付近に比較

的新しい盗掘坑があり、直方体のアドベを積み重ねた壁面が確認された。一方で表採土器には無頸壺の口縁部がやや外切れて丸みを帯びたものがあるため、形成期後期の遺構も埋もれている可能性が高い。なお、本遺跡はブローの踏査では登録されていない。



写真 10 北 11 遺跡全景、北西から
(写真奥には北 10 遺跡)

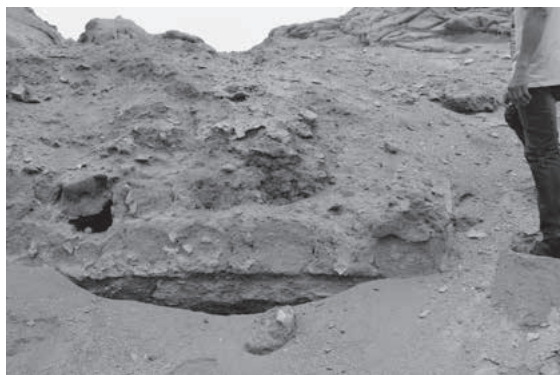


写真 11 北 12 遺跡の円錐形アドベ製壁体

北 12

ブローの調査では登録されておらず、芝田が 2004 年の踏査で発見した遺跡である。セロ・ブランコ遺跡からは、およそ 800m 東方に位置する。セロ・ブランコという同名の岩山の西面に本遺跡はあり、セロ・ブランコ村の東北端とは舗装道路を一本挟んだ向かい側になる。山の南面中腹に展望台があり、セロ・ブランコ村から展望台へ向かう登山道半ばの左手斜面に遺構の一部が露出している（写真 11）。セロ・ブランコ山の尾根が一部視界を遮っているが、遺構の上方に立つと、かろうじてセロ・ブランコ遺跡を遠望することができる。地表で確認されたのは、幅およそ 2.5m、高さ 0.5m ほどの土留壁とおぼしきものである。この土留壁の登山道側の端は、山の上方向かう形で直角に曲がっている。したがって、現在地表に露出している部分は、基壇もしくは部屋状構造物の角に相当するものと思われる。一方、壁の基部に床面の痕跡が見られること、およびその下方に横穴が穿たれていることから、露出している壁より下方の斜面に存在したであろう遺構は、盗掘活動などによって既に破壊されてしまったと思われる。建材としては、底面（円形）の直径が 25～30cm ほどの円錐形アドベが使用されている。

ネペーニャ谷下流域においては、円錐形アドベの存在は形成期中期もしくは更に古い時期の指標の一つである [Samaniego 2012: 18; 芝田 2011: 111-112, 136-137]。土留壁の周囲の地表では、形成期と思しき土器片を観察することは叶わなかった。一方、土留壁のやや上方、山の東部頂上、北部裾野などには、無数の盗掘坑や方形アドベの遺構があり、それら周辺には人骨や地方王国期を始めとする形成期より後の時代の土器が観察された。セロ・ブランコ山が地方王国期の前後に埋葬地として利用されていたことは明らかである。この山を埋葬地とすることが先スペイン期の様々な時代を通じて行われた伝統だとしたら、円錐形アドベの構造物周辺を調査することで形成期の埋葬を発見できる可能性がある。

遺跡名	形成期前期	形成期中期	形成期後期		備考
	HC期	CB期	NP期	SM期	
セロ・ブランコ	○	○	○	○	CB期とNP期は神殿だが、SM期には放棄される。
北 1	○				CB期の可能性が高いが、HC期以前の可能性もある。
北 2			○		
北 3			○		SM期の可能性が高い。
北 4	○				CB期の可能性が高いが、HC期以前の可能性もある。
北 6			○		NP期の可能性が高い。
北 7			○		
北 10			○		
北 11			○		
北 12	○				CB期の可能性が高いが、HC期以前の可能性もある。
注：セロ・ブランコ以外の遺跡は未発掘であり、踏査による時期比定であるため、形成期前期と中期の判別、および後期の細分が困難である。					

表 2 調査エリア北岸の形成期遺跡

2-3. 南岸の遺跡

スーテ・パホ複合 (PV31-121A, B, C, D)

スーテ・パホ複合はネペーニャ谷下流域の左岸、遺跡名の元となったスーテ・パホ地区に位置する。ペルー北部から中部海岸の他の河川下流域と同じく、平野部一帯は細々と流れるネペーニャ川から水を引いた灌漑耕作地であり、河谷兩岸はほぼ植生のみられない岩山と砂地になっている。この耕作地と砂地にまたがる約 1.4×0.8km の範囲に、複数のマウンド、大壁、部屋状構造物などの遺跡・遺構が地表に一部露出している（図 2）。これらの一部^{（註 2）}を発見・登録したブローはモチェ文化および中期ホライズンに属すると比定したが [Proulx 1985: 111-113]、筆者らの調査によって全て形成期のものである可能性が高いと判明した。ワカ・スーテ・パホとスーテ・パホ G を除いて壁の方向軸が一致すること、および後述する他遺跡との比較から、全体で 1 つの遺跡複合を構成するものと考え、「複合」の名のもとに一括した。以下、複合に含まれる各遺跡・遺構について記述する。

ワカ・スーテ・パホ

ネペーニャ川左岸の耕作地や葦の茂みと、荒涼とした砂地との境界付近にあり、とりわけ背の高い葦の茂みによって周辺部から見えにくくなっている。とはいえ、この遺跡から北に 700m も離れていないワカ・パルティエダ遺跡の頂上部からは目視可能である。本遺跡はブローの調査では登録されておらず、筆者らは 2013 年のワカ・パルティエダ遺跡発掘に伴う踏査で発見し測量を行ったが、この時点ではさらに南の砂地に広がる形成期諸遺跡を確認することはできなかった。地形図から見て取れるように、遺跡は 2 つのマウンドとその間のひらけた空間から成る（図 3）。西マウンドは東西の長辺が約 55m、南北の短辺が約 50m、現在の地表からの高さが 4m ほどである。現在の耕作地に面した南側を除いて、マウンドの北面、西面、東面に大型の石材を使用した土留壁の頭が露出している。石材は最大のものでは長径が 1m を越え、外面が平坦に加工されている。石材の大きさと加工の程度は、セロ・ブランコとワカ・パルティエダ両遺跡におけるネペーニャ期の巨石建築を想起させ

る。西マウンドの南方、小さな耕作地との境界部周辺では、数カ所にわたって平らな岩盤が露出している。つまり遺跡周辺部の堆積は浅く、したがって巨石建築の下により古い大規模建築が眠っている可能性は低いと考えられる。

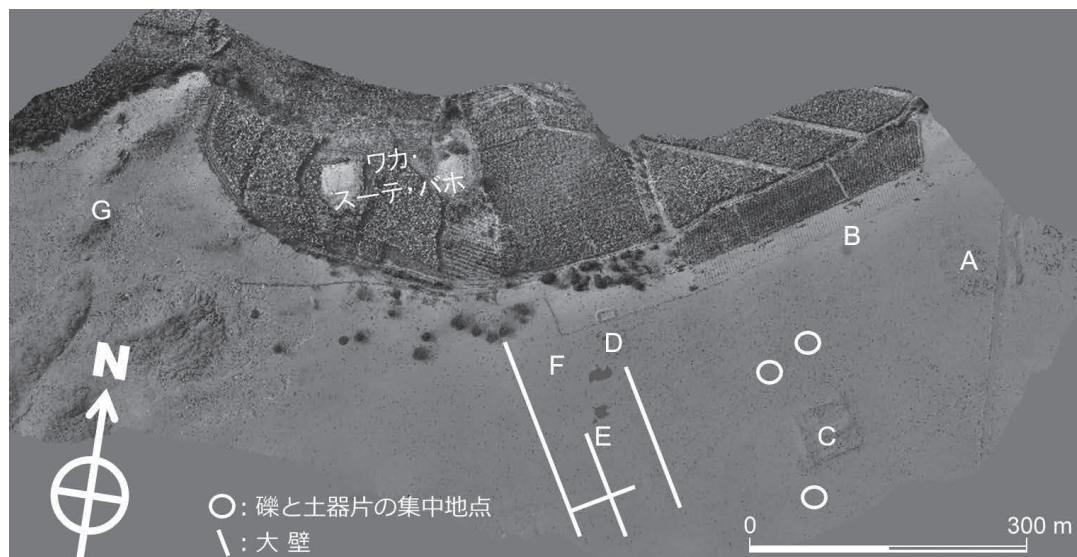


図2 スーテ・バホ複合の全体図

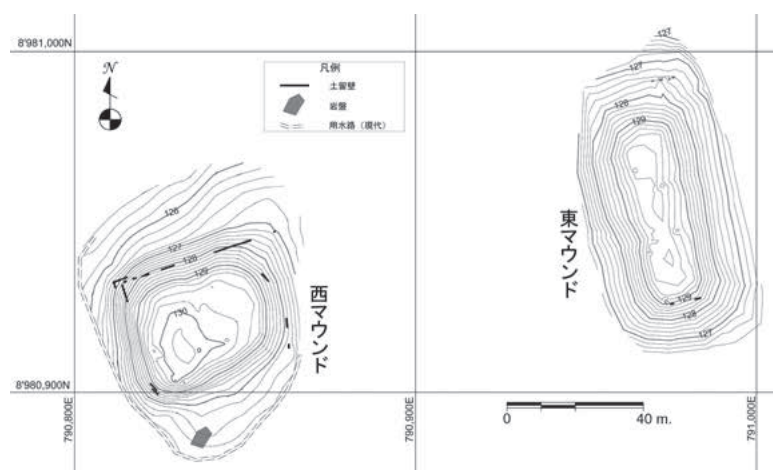


図3 ワカ・スーテ・バホ遺跡平面図（座標はWGS84による）

西マウンドから約85m離れた東マウンドは、東西が約50m、南北が約85m、高さは3mほどである。南側にのみ土留壁の頭が若干露出している。北側には重機などの走行で破碎されたと思しき石列がみられる。両者はほぼ平行に配置されている。

下流域にある他の諸遺跡と比べて、ワカ・スーテ・バホの表面には盗掘坑が顕著なまでに少ない。少なくとも

も、他遺跡でしばしばみられる地方王国期の埋葬を、盗掘者が掘り出した痕跡はみられない。遺跡表面の土器片は、ほとんどが無装飾の胴部破片ばかりであるが、若干数の無頸壺口縁部が観察された。これらは縁に角のついた外切れを呈しており、セロ・ブランコ遺跡やワカ・パルティータ遺跡の土器編年に照らし合わせると、ネペーニャ期またはサマンコ期における無頸壺の典型的口縁と言える。

スーテ・バホ A (PV31-121B)

本遺跡はスーテ・バホ複合の東端に位置する。およそ $100 \times 60\text{m}$ の範囲に無数の土器片、骨片、貝殻、礫などが散乱しており、なだらかな地表の凹凸からみて低い壁の方形プラン構造物が砂の下に埋もれていると思われる。形成期後期に特徴的な外切れ口縁の無頸壺片が多数確認されたのみならず、セロ・ブランコ遺跡の形成期後期後半すなわちサマンコ期にみられた織物圧痕模様の土器片、同遺跡の形成期後期に多い楽器（アンタラ）片、さらには形成期後期のカイラン遺跡から出土したもの〔Chicoine and Ikehara 2010: 358, fig.14-B〕と同様の赤字白彩の装飾土器片も発見された（写真 12）。スーテ・バホ複合の中で最も多くの遺物が観察されることから、形成期の居住エリアであると推測される。

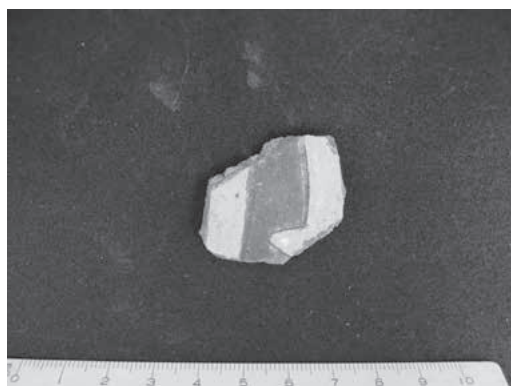


写真 12 スーテ・バホ A の赤地白彩土器片



写真 13 スーテ・バホ C の全景、南から



写真 14 スーテ・バホ C の無頸壺

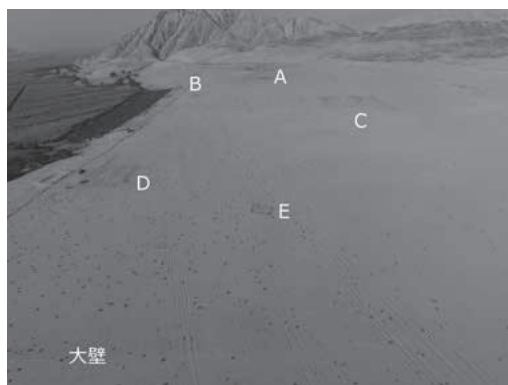


写真 15 スーテ・バホ複合主要部の全景、西から

スーテ・バホ B

スーテ・バホ A から西に 100m 弱、河岸段丘上の砂地の北限に近い位置にある。10×7m ほどの小さな遺構であり、北に向かって開口するコの字型プランを呈する。コの字の各辺は低い両面壁で構成されている。地方王国期の黒色土器片の他、形成期後期の無頸壺が確認された。プローによる登録はない。

スーテ・バホ C (PV31-121A)

スーテ・バホ複合の南部に位置し、この複合では最大の建築物である。約 60×60m の方形プランで、内部には石積みの仕切り壁が複数あり、小部屋、通路、広場などを形作っていると思われる（写真 13）。プローはモチエの土器片が多いと記述しているが [Proulx 1985: 112]、筆者らの踏査では形成期後期の無頸壺が複数確認された（写真 14）。この土器による時期比定を補強するのが、カイランやワンバッチョといったネペーニャ河谷下流域に特徴的な形成期後期の遺跡との高い共通性である。これらの遺跡には複数の広場があり、各広場の周囲に複数の小部屋や通路が配置されていた。また饗宴の廃棄物が多数出土しているのも特徴である [Chicoine 2006; Chicoine and Ikehara 2014]。なお、スーテ・バホ C から北側およそ 120m 以内に 2 か所、50m ほど南に 1 か所、地表に礫と土器片が集中的に分布する地点があった。

スーテ・バホ D (PV31-121C)

スーテ・バホ C から北西へ 200m 強の位置にあり、壁のラインが明瞭な建築物としてはスーテ・バホ複合で二番目に大きなものである（写真 15）。約 30×30m の方形プランであり、スーテ・バホ C と同様の内部構造が一部観察される。地表にはチムー文化的な黒色土器片も点在するが、形成期後期の無頸壺片も多い。

スーテ・バホ E (PV31-121D)

スーテ・バホ D より 90m 南に位置する、スーテ・バホ複合で最小の構造物の 1 つである。7×7m ほどの方形プランで、東面に小さな開口部をもつ小部屋状構造物である（写真 15）。チムー文化的黒色土器片もあるが、形成期後期の無頸壺と短頸壺が確認された。

スーテ・バホ F

スーテ・バホ D から 80m ほど南西の砂地に、スーテ・バホ E とほぼ同規模の方形構造物が、かろうじて壁の頭を露出させるのみで深く埋もれていると思われる。時期比定可能な土器片はなかったが、これまで記述してきた他の遺構と同じ形状と方向軸であることから、複合を構成する遺構であると推察される。プローの踏査では未登録である。

スーテ・バホ G

スーテ・バホ D から西に 600m、ワカ・スーテ・バホの西マウンドからでも 270m 離れた位置にある。30×30m 程度の範囲に、ワカ・スーテ・バホと類似する低い巨石製土留め壁がみられる。様々な時代の土器片に混じって、形成期後期の無頸壺がみられた。なお壁の方向軸は A～F とくらべて少し西側に傾いている。プローによる登録はされていない。

大壁

スーテ・パホ複合の主要な構造物と同じ方向軸で、南北に延びるもの（写真 15）が少なくとも 3 本、これに直行して東西に延びるものが少なくとも 1 本確認された。長いものは少なくとも 150m を超えるが、地表の凹凸が極めて浅いため、Google Earth の画像やペルー空軍の航空写真の画質ではほぼ同定不可能である。一方、踏査時の地表観察では近すぎて全体像が把握できず、踏査とドローンによる三次元写真測量を組み合わせることで初めて同定することが可能となった。同様の大壁の事例は、形成期後期のカイラン遺跡にあり、ここでも遺跡を縦横に区切るように数 100m にわたって延びている [Chicoine and Ikehara 2014]。

遺跡・遺構名	形成期前期	形成期中期	形成期後期		備考
	HC期	CB期	NP期	SM期	
ワカ・パルティエダ		○	○	○	CB期とNP期は神殿だが、SM期には放棄される。
ワカ・スーテ・パホ			○		建築はNP期の可能性が高い。
スーテ・パホA			○		
スーテ・パホB			○		
スーテ・パホC			○		
スーテ・パホD			○		
スーテ・パホE			○		
スーテ・パホF			○		
スーテ・パホG			○		建築はNP期の可能性がある。
大壁			○		

註：ワカ・パルティエダ以外の遺跡は未発掘であり、踏査による時期比定であるため、形成期後期の細分が困難である。

表 3 調査エリア南岸の形成期遺跡

3. 予備的考察

本研究における大きな成果の 1 つは、ネペーニャ川南岸に位置するスーテ・パホ地区に分布する複数の遺跡が形成期後期に属することを初めて確認し、スーテ・パホ複合として「発見」したことであろう。1960～70 年代のプロローによる踏査では、河岸段丘上の一部遺構が登録されていたが、形成期より後の諸文化に属するとみなされており、また表採土器等によって比定された各遺構の時期も様々であった [Proulx 1985]。一方、筆者らの踏査では、これまで見逃されてきた粗製土器の口縁部形状から、同複合の全ての遺構において形成期後期における利用の証拠が得られた。これはセロ・ブランコおよびワカ・パルティエダ遺跡の発掘による土器編年がなければ不可能な時期比定である。また、少数ながら土製楽器（アンタラ）片や装飾土器片もスーテ・パホ複合が形成期後期である説を補強している。

筆者らの調査範囲より河口側の諸遺跡にて北米の調査団が実施した発掘調査も、スーテ・パホ複合の同定に欠かせない比較資料を提供している。シコアンらによるワンバッチョ遺跡およびカイラン遺跡の発掘 [Chicoine 2006; Chicoine and Ikehara 2010, 2014]、ヘルマーらによるサマンコ遺跡の発掘は [Helmer 2014]、スーテ・パホと同タイプと思われる建築複合を詳細に報告している。とりわけ参考になるのが、ネペーニャ河谷で最大の面積を誇るカイラン遺跡である。多数の方形広場、小部屋、通路などが相互に連結するように広がる高さの抑え

られた基本プランに加え、遺跡周縁部にある唯一の大型マウンド、遺跡内を縦横に区切る大壁といった建築特徴が挙げられるが、先に記述したように、これらは全てスーテ・パホ複合にも存在する可能性が高い。

シコアンらと筆者は、共同研究でネペーニャ河谷における形成期諸遺跡の可視領域分析を行ったことがある。その結果、カイルン型センターの可視領域は相互にほとんど重複しないこと等からセンター間の相互補完性が推測され、一方でカイルン型センターとセロ・ブランコやワカ・パルティエダのような大規模基壇を主とするセロ・ブランコ型センターでは可視領域が広範囲で重複するため両者の間には競合関係が想起された [Chicoine et al. 2017]。今回の踏査で形成期遺跡と同定されたスーテ・パホ複合は、基壇状のワカ・パルティエダ遺跡と 1km ほどしか離れていないこともあり、可視領域は大きく重複することになる。その一方で、上記共同研究を行った時点までに確認されていたいかなる事例とも異なり、両者があまりにも近いため、競合関係を想定しても説得力に欠けてしまう。ワカ・パルティエダとスーテ・パホ複合の関係については、前者の放棄後に後者が建設される等の時期差か、後述するような同時期の神殿と居住エリアの関係が考えられるだろう。そして、いずれの説が実証されるにせよ、海岸地帯では遅滞していた形成期後期の研究が、今後のスーテ・パホ複合の発掘調査によって大きく進展することは間違いない。

本研究のもうひとつの成果は、神殿と居住エリアの関係についてのものである。ネペーニャ川南岸のワカ・パルティエダ遺跡に隣接するエリアは現代のサトウキビ耕地になっており、少なくともその地表においては形成期居住エリアの可能性のある遺跡は観察されず、これまでのところ形成期の土器が表採されたこともない。一方、ワカ・パルティエダから 700m ほど離れた耕地と河岸段丘の境界周辺は状況が異なり、スーテ・パホ A に代表されるような形成期後期の居住施設と推測される遺跡が確認されている。つまり、両者が同時期だとすると、河川に近いワカ・パルティエダ神殿と、そこから少し離れた河岸段丘上に神殿の支持者らの居住エリアがあるという位置関係になる。ネペーニャ川北岸に位置するセロ・ブランコ遺跡の場合、直近エリアには北 8 と北 9 の小マウンド遺跡が位置するが、形成期の遺構・遺物は全く観察されなかった。そしてセロ・ブランコ遺跡から 700m 以上上流方向に離れた北 11 において形成期後期の土器が確認された。下流域のワカ・パルティエダとセロ・ブランコ両遺跡周辺の踏査から導き出されるのは、恐らく形成期後期前半のネペーニャ期において、神殿と居住エリアは一体化することも隣接することもなく、一定の距離が置かれていたという仮説であり、中流域に関するイケハラの説と同様の結果となった。ただし今回の踏査では神殿と居住エリアの同時期性が担保されなかったため、仮説の検証は今後の居住エリア発掘まで持ち越されることになる。最後に、形成期中期の神殿と居住エリアの関係についても暫定的に考察したい。ワカ・パルティエダとセロ・ブランコの両遺跡では、既に述べたように芝田の発掘によって形成期中期の神殿建築が確認されている。ネペーニャ河谷において他に形成期中期の遺跡が発掘された事例はなく、踏査によって形成期中期の可能性が示唆されたのは北 1、北 4、北 12 のみであった。いずれも北岸に位置するから、南岸のワカ・パルティエダ神殿に関連する居住エリアとは考えにくい。また、おそらく北 12 は墓地、北 1 は神殿であるから、セロ・ブランコ神殿の居住エリアでもない。むしろ北 1 が神殿ならば、その居住エリアとして直近に位置する北 4 を見るべきかもしれない。いずれにせよ、形成期中期における神殿と居住エリアの位置関係は、形成期後期で見いだされたパターンとは異なるだろう。例えばネペーニャ河谷の南隣に位置するカスマ河谷下流域では、谷底の形成期前期大神殿に隣接する居住エリアが確認されている [e.g., Pozorski and Pozorski 1986]。ネペーニャ河谷でも、中期以前は谷底の神殿に隣接して居住エリアが存在したとすると、サトウキビ耕地の中、河川氾濫層の奥深くに埋もれている可能性は考慮せねばなるまい。

なお、スーテ・パホ複合の西方にはベータ・コロラダ地区が、東方にはスーテ・パホ山を挟んでベータ・ネ

グラ地区が広がる（図 1）。その双方において、今回の調査では形成期の遺跡・遺物は全く発見されなかった。言い換えると、ネペーニャ川南岸において、形成期の遺跡はスーテ・パホ地区に集中的に分布するというものである。同時期の遺跡が集中的に分布する傾向は、北岸でも観察された。大きく分けて、①河谷平野の中央に近いセロ・ブランコ遺跡からセロ・ブランコ山の西斜面にかけての一带（セロ・ブランコ遺跡および北 10、11、12 遺跡）、②河谷北端のパンパ・カルボネーラ地区（北 1、4 遺跡）、③現在のネペーニャの町の北から北東にかけて（北 2、3、6、7 遺跡）と、3 つのグループに分けることができる。そして①では形成期の様々な時期、②では形成期中期以前、③では形成期後期の活動が見込まれる。このような集中的遺跡分布は政体や共同体といった社会的なまとまりを反映しているのか、利用される土地の条件が時期によって異なるのか等も、ネペーニャ河谷下流域における今後の調査研究の課題としたい。

【謝辞】

本稿は平成 28～30 年度 JSPS 科研費 16K03161 の助成を受けて行われた調査の成果の一部である。調査準備にあたっては Verónica Hung 氏、Nelly Martell 氏、Delicia Regalado 氏、および兵庫県立嬉野台生涯教育センターに便宜を図っていただき、調査中は Alonso Hung 氏と Raul del Prado 氏にご協力いただいた。ここに感謝の意を表する。

註

- （註 1） その背景には、北部海岸から中央海岸にかけて形成期中期までに栄えた神殿群が形成期後期になると放棄されているという現象、すなわち大貫が提唱する「海岸空白」があると思われる [Onuki 1993; cf. Shibata 2014]。
- （註 2） 本稿におけるスーテ・パホ A、C、D、E である。

参考文献

Burger, Richard

1981 The Radiocarbon Evidence for the Temporal Priority of Chavin de Huantar. *American Antiquity* 46: 592-602.

1992 *Chavin and the Origins of Andean Civilization*, Thames and Hudson, London.

Castillo, Luis Jaime

2014 Arqueología y tecnología - novedoso uso de drones y modelos 3D en la investigación, *Gaceta Cultural* 46: 2-7.

Chicoine, David

2006 *Architecture and Society at Huambacho (800-200 B.C.), Nepeña Valley, Peru*. Ph.D dissertation, School of World Art Studies and Museology, University of East Anglia, Norwich.

Chicoine, David, and Hugo Ikehara

2010 Nuevas evidencias sobre el Periodo Formativo del valle de Nepeña: resultados preliminares de la primera temporada de investigaciones en Caylán. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 349-369.

2014 Ancient Urban Life at the Early Horizon Center of Caylan, Peru, *Journal of Field Archaeology* 39(4): 336-352.

Chicoine, David., Hugo Ikehara, Koichiro Shibata and Matthew Helmer

2017 Territoriality, Monumentality, and Religion in Formative Period Nepeña, Coastal Ancash. In *Rituals of the Past -*

Prehispanic and Colonial Case Studies in Andean Archaeology, edited by S. Rosenfeld and S. Bautista, pp. 123-149, University Press of Colorado, Colorado.

Daggett, Richard

1984 *The Early Horizon Occupation of the Nepeña Valley, North Central Coast of Peru*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, University Microfilms, Ann Arbor.

Helmer, Matthew

2014 *The Archaeology of an Ancient Seaside Town: Performance and Community and Samanco, Nepeña Valley, Peru*. Dissertation, School of Art History and World Art Studies, University of East Anglia, Norwich.

Ikehara, Hugo

2015 *Leadership, Crisis, and Political Change: The End of the Formative Period in the Nepeña Valley*. Doctoral Dissertation, University of Pittsburgh, Pittsburgh.

Kaulicke, Peter

1998 El Período Formativo en la Costa Norte: introducción, *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 15-18.

2010 *Las cronologías del Formativo - 50 años de investigaciones japonesas en perspectiva*. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Lanning, Edward

1967 *Peru Before the Incas*. Prentice Hall, Eaglewood Cliffs, New Jersey.

Onuki, Yoshio

1993 Las actividades ceremoniales tempranas en la cuenca del Alto Huallaga y algunos problemas generales. In: *El Mundo Ceremonial Andino (Senri Ethnological Studies 37)*, edited by L. Millones and Y. Onuki, pp. 69-96, National Museum of Ethnology, Osaka.

Pozorski, Shelia, and Thomas Pozorski

1986 Recent Excavations at Pampa de las Llamas-Moxeque, a Complex Initial Period site in Peru. *Journal of Field Archaeology* 13: 381-401.

Proulx, Donald

1968 *An Archaeological Survey of the Nepeña Valley, Peru* (Research Reports No.2, Department of Anthropology). University of Massachusetts, Amherst.

1973 *Archaeological Investigations in the Nepeña Valley, Peru* (Research Report No.13, Department of Anthropology). University of Massachusetts, Amherst.

1985 *An Analysis of the Early Cultural Sequence in the Nepeña Valley, Peru* (Research Report No.25, Department of Anthropology). University of Massachusetts, Amherst.

Rengifo, Carlos

2014 *Moche Social Boundaries and Settlement Dynamics at Cerro Castillo (c. AD 600-1000), Nepeña Valley, Peru*. Doctoral Dissertation, University of East Anglia, Norwich.

Samaniego, Lorenzo

2012 Arte mural de Punkurí, Nepeña, Ancash. *Investigaciones Sociales* 16(28): 15-33.

芝田幸一郎 (Shibata, K.)

2010 El sitio de Cerro Blanco de Nepeña dentro de la dinámica interactiva del Periodo Formativo, *Boletín de*

Arqueología PUCP 12: 287-315.

- 2011 『ペルー北部中央海岸ネペーニャ谷からみたアンデス形成期社会の競合モデル - 神殿、集う人々、旅する指導者』東京大学大学院総合文化研究科博士論文, 東京.
- 2011b Cronología, relaciones interregionales y organización social en el Formativo del valle bajo de Nepeña: esencias y perspectiva. In *Arqueología de la Costa de Ancash*, edited by M. Giersz, and I. Ghezzi, pp. 113-134. Centro de Estudios Precolombinos de la Universidad de Varsovia and Instituto Francés de Estudios Andinos, Lima.
- 2014 Centros de "Reorganización Costeña" durante el Periodo Formativo Tardío: Un ensayo sobre la competencia faccional en el valle bajo de Nepeña, costa nor-central peruana. *Senri Ethnological Studies* 89: 245-260.
- Vogel, Melissa. and David Pacifico
- 2011 Arquitectura de El Purgatorio: capital de la cultura Casma. In *Arqueología de la Costa de Ancash*, edited by M. Giersz, and I. Ghezzi, pp. 357-397, Centro de Estudios Precolombinos de la Universidad de Varsovia and Instituto Francés de Estudios Andinos, Lima.

原稿受領日 2018年5月20日

原稿採択決定日 2018年8月30日